2013年度関東歴史教育研究協議会第25回大会（関歴研神奈川大会）報告

大師高校　**澤野　理**

はじめに

本稿は、2014年3月7日（金）にかながわ県民センターで開催された「2013年度関東歴史教育研究協議会第25回大会」に関する簡単な報告である。関東歴史教育研究協議会（以下、関歴研と記す）は、関東地区の都県歴史教育研究団体の交流を深めることにより歴史教育の充実と発展を図る目的で1986年に設立された。研究協議会という堅い名称だが、実際は親睦団体的性格が強く、毎年開催する研究大会も開催都県の研究会を他都県に公開することであてている。大会は各都県輪番で開催し、1989年の栃木県立宇都宮高等学校における第1回大会に始まり今回で25回を数えることとなった。

神奈川県での開催は、1993、2000、2007年度に続き今回で4回目となった。他の都県では秋に開催することが多いが、本県では歴史分科会の研究発表会にあわせて3月に開催している。大会は、例年の歴史分科会の研究発表会に史跡見学を加えて実施された。以下、本稿では大会当日の様子を、研究発表から順に紹介したい。

1　研究発表

藤沢総合高校の石橋功による「アジア史を世界史でどう教えるか」、横須賀大津高校の佐藤雅信による「日本に来た媽祖 ～ 東アジアの航海神の足跡をたどって」という2本の発表が行われた。詳しい発表内容については、別頁にある発表者自身の報告をご参照いただくとして、ここでは両者の発表の特色を紹介したい。

石橋の発表にある「どう教えるか」とは、昨今「授業力云々」というコンテクストで取り沙汰されている具体的な授業法（いわゆる "How to"モノ）ではない。それ以前にわれわれが「どのようなフレーム」で「どのような内容」を教える（学ばせる）べきであるか、ということに対する意見の表明である。石橋はここで（おそらくは自身の反省も踏まえながら）、受験勉強を背景とした細かな事件史によって構成される授業や西欧中心の視点に立った世界史の授業に異議を唱える。それは、これらが、結果として教科書の最後までたどり着けない授業、教師の意図とは関係なくアジア諸地域に対する偏見を助長する危険性をはらんだ授業となるからである。これに対し、石橋はアジア史を中心に世界の一体化を取り上げる授業の実践例を示しながら、事件史やナショナルヒストリーの枠を超えた授業の可能性を提示した。

佐藤は、千葉・茨城に点在する珍しい形の神社群の分布を切り口に、媽祖という中国（福建省）起源の航海神（女神）がアジアの海域ネットワークの展開とともに各地へ伝播したことを発表した。日本やアジアの各地におよぶフィールドワークの成果をベースに、話題は媽祖の来歴から、「鎖国」期の日本と明清交替期中国の関係、さらに（有名な!）水戸光圀と媽祖の関係など多岐に及んだ。佐藤は、冒頭で媽祖の教材化の事例を日本史・世界史の両方であげたが、「鎖国」の国際関係や東アジア海域経済圏と華人進出といったテーマは、そもそも日本史・世界史と切り分けられない境界領域のテーマであろう。それは決して悪い意味ではない。むしろ、こうした授業実践を積み重ねることによって、石橋の主張する新しい視点に立った授業の可能性も広がるといえよう。

2　講演会

講師は、早稲田大学文学学術院教授の李成市先生。演題は「古代史から東アジアの未来を考える」

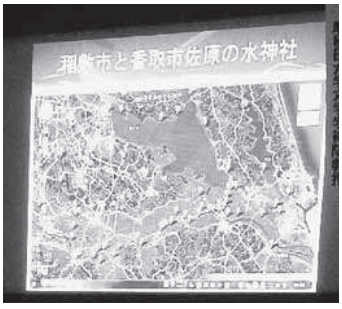
詳細は、前節と同じく別頁にある講演要旨をご参照いただくとして、現代の中国・朝鮮・日本が相互に抱える歴史認識の葛藤を克服するために古代史研究者としてどのようなことができるかという視点でのご講演は、どのような専門分野に身を置いているとしても、歴史教育に関わるわれわれにとっての共通した課題であることを改めて認識させられた。筆者個人としては、瀋陽と博多を結ぶ直線上

に朝鮮史上で重要な年が分布していること、その中での平壌の歴史的な位置についての指摘、日本における漢字文化の受容が8世紀初頭を境に朝鮮半島を経由しなくなったこと、日本において漢籍の素養が強調されたのが近世以降であったという主張などに興味をおぼえた。

3　史跡見学

関歴研では、最後に史跡見学を実施して大会を終了することが通例となっている。他県では、午後半日を使ってバスによる見学を行う例もあるが、神奈川では、会場から徒歩圏に見学地が多く分布しているため徒歩による見学となった。今回の見学地は、2000年度と同じく旧東海道神奈川宿周辺の見学を行った。主な見学地は、神奈川台関門跡・本覚寺(アメリカ領事館址)・甚行寺(フランス公使館址)・本陣跡・宗興寺(ヘボン診療所址)・浄瀧寺(イギリス領事館址)・高札場・金蔵院・熊野神社。

京浜東北線に乗り横浜から東神奈川へ向かう間の車窓から駅間距離の割に多くの寺社があることに気づかれる方も多いと思う。それは、この間が旧東海道神奈川宿のエリアであったためである。これだけなら、他の宿場町と変わらないのだが、神奈川宿の場合、開国後これらの寺社の多くが欧米からの外交使節団の公館や宣教師の宿泊施設にも利用された点が他とは異なる。史跡踏査委員による説明から、往時を想起した見学者も多かったことであろう。2時間弱と短い見学時間であったが、17時に東神奈川駅付近で予定どおり見学を終了して解散。ここに関歴研の全日程を無事終了した。

おわりに

全歴研の熱も冷めやらぬ秋口から準備を始め、11月末には県外諸機関へ開催の第一報を伝えるという忙しい日程（全歴研の会計処理との並行作業!）で実施に漕ぎ着けた大会であった。県外諸機関からは、大いに興味を示していただき、われわれも多くの参加者を期待したのだが、あいにく当日が高校入試当日であったり（群馬・栃木)、卒業式もしくは予行の特異日であったり（東京）と、県外参加者は、10名程度に止まってしまった。また、県内の高校も学年末の成績処理等でなかなか都合のつかない先生方が多かったとうかがっている。そうした中でも、あわせて70名近くの先生方に参加いただいたことは、主催者としてはうれしい限りである。ここに参加いただいたすべての方に深く謝意を表することで、結びの言葉とさせていただく。